

武蔵野日曜聖書講筵 降誕節

愛の光

——ルカ伝第2章8～35節——

1989年12月24日

小池辰雄

虹霓 コスモス 虹のどの色か 自然と融け合っている世界 夢こそ現なり 大感動の世界
 信行 無光の光 魂の光 汝の太陽 デイバイン・リベンジ (聖なる復讐)

【ルカ2】

8 この地に野宿して夜、群を守りおる牧者ありしが、9 主の使その傍らに立ち、主の栄光その周囲を照したれば、甚く懼る。10 御使かれらに言う『懼るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信を我なんじらに告ぐ、11 今日ダビデの町にて汝らの為に救主うまれ給えり、これ主キリストなり。12 なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しおる嬰兒を見ん、是その徴なり』13 忽ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、14 『いと高き所には栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』15 御使等さりて天に往きしとき、牧者がいに語る『いざ、ベツレヘムにいたり、主の示し給いし起これる事を見ん』16 乃ち急ぎ往きて、マリヤとヨセフと、馬槽に臥したる嬰兒とに尋ねあう。17 既に見て、この子につき御使の語りしことを告げたれば、18 聞く者はみな牧者の語りしことを怪しみたり。19 而してマリヤは凡て此等のことを心に留めて思い回せり。20 牧者は御使の語りしごとく凡ての事を見聞せしによりて、神を崇め、かつ讚美しつつ帰れり。

21 八日みちて幼児に割礼を施すべき日となりたれば、未だ胎内に宿らぬ先に御使の名づけし如く、その名をイエスと名づけたり。……

25 視よ、エルサレムにシメオンという人あり。この人は義かつ敬虔にしてイスラエルの慰められんことを待ち望む。聖霊その上に在す。26 また聖霊に主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたりしが、27 此のとき、御霊に感じて宮に入る。両親その子イエスを携え、この子のために律法の慣例に遵いて行わんとて来りたれば、28 シメオン、イエスを取りいだき、神を讚めて言う、29 『主よ、今こそ御言に循いて僕を安らかに逝かしめ給うなれ。30 わが目は、はや主の救を見たり。31 是もろもろの民の備え給いし者、32 異邦人を照らす光、御民イスラエルの栄光なり』33 かく幼児に就きて語ることを、其の父母あや



しみ居たれば、³⁴シメオン彼らを祝して母マリヤに言う『視よ、この幼児は、
イスラエルの多くの人の或は倒れ、或は起^たたん為に、また言い逆いを受くる
徴のために置かる。³⁵——剣^さなんじの心をも刺し貫くべし——これは多くの
人の心の念^{おもい}の顕れん為なり』

●虹霓

1940年から始めて、クリスマス³⁶を49回迎えたわけです。もうクリスマス³⁷のことは私
の書いたものに全部載っていますから、特に第一巻『無者キリスト』の
「言い逆らしいの徴」

のところはよく時々読んでいたきたい。今日はまた角度を少し変えます。何回、クリ
スマス³⁸にしても、決して私は同じことは語らんです。

こないだ、私は『エン・クリスト』41号に「虹霓」という詩を書きました。

虹霓

1988年8月28日作

西の方 ^{かた}山なみの上に ^え陽の佇めば、

東の方 ^{かた}知らぬ間に ^え雷雨襲ひ来ぬ。

湖上には夢の如、^{ごと}虹霓ぞ現はる、

夏の雷雨の去りにしあとに。

何ぞ奇^くすしき、^く陽光は無色なり、

小さき雨滴も無色なるに、

陽光^{えんむ}烟霧^むを照り貫^ぬけば、

七彩の虹霓^{こうげい}立ち現はるとは！

われらは一つなり、我らはみな人間なるぞ、

さはれ我らは一つに非ず、^{おのがじし}各人固有の顔^{かん}ばせと

さまざまなる資性^{さが}と色彩^{しき}異なる才能^もを有つ。

そは人々の調和 ^え虹彩の如く表はれんためなり。

上よりは天意の顕現^{のぞ}臨むべし、

そはおのが光彩^{えん}の使命^{はた}を果さんためぞ。

漢民族は虹を天の龍の姿とみる。「虹霓」とは——虹は二重に見えることがある——「虹」

は雄の龍、「霓」は雌の龍なんです。それで虹霓という。私は辰年だから、これから雅号を「天

虹」と書こうかな。

●コスモス

この詩に書いてあるとおり、太陽の光は無色、水滴も無色。無色の光が無色の水滴に当たっ
たら、その角度によって、これが七色に光る。本当は無限なんです。七というのは目に見



える色彩として七だけでも、段階からいうと無限の段階がある。そのように、根底は無の世界、無色の世界であつて、その無色は無限色をもつていたということです。

我々一人ひとりが顔が違うように——世界中に同じ顔は一つもない——一人ひとり神さまの作品としては絶対特殊なんです。神さまが絶対者であつて、その創つくつたものは、個は全部、絶対的な特殊なんです。相対的存在だけでも、特殊性においては絶対的なんです。人真似をする必要はひとつもない。いわゆる全体主義ではだめ。典型的ではだめです。

今日もたくさんきれいなお花をいただいています。調和をなしている。それぞれの姿、形、香、色彩。そういう大調和、コスモスになるわけです。「コスモス(宇宙)」というのは素晴らしい言葉だ。宇宙とは大調和のものなんです。星の世界もおそらくそうなんでしょうね。だから、私は、

「神さまは最大の芸術家である」

という。最大の「最」の字もいらない。神さまだけが本当の芸術家なんです。真似するならば、神さまを真似するしか仕方がない。それは「真似」ではない、「イミタチオ」ではない。神の中に入っていけば、一人ひとりの特殊性が光ってくる。

私は虹が好きなのはそういうわけです。みんなそれぞれなんです。だから、担任の先生は生徒の一人ひとりの天賦、天から授かった資質才能をみて指導する。なにも大学に入ることが目的でも何でもない。その人に最もふさわしいことをやればいい。線路坑夫だつて何だつていいんだ。

そういう本当のフィロゾフィーレン(哲学すること)が日本人は本当に少なくて困つたものだ。だから、精神構造として日本が一番だめではないかな。ある意味において素晴らしいものが日本にはある。世界一と言つてもいいくらいのもを持つている。それでありながら、どうしてこうなのか。政治家も本当のフィロゾフィーレンしてないし。

「経済大国から宗教大国になれ」

と今度も書いてやった。文化大国と言つてもいいけれども、文化の根底は宗教だから。芸術の本当の素晴らしいところは、永遠のところからものを見ていることです。

●虹のどの色か

それが本当の「自重じちやう」、己を重んずるということです。神に在あつて重んずるんです。神抜きで重んじたら、これはとんでもない。我々にとつては「キリストに在あつて」です。それが本当の意味において

「キリストを誇る」
ことです。

パウロは始めは自分を誇つていた。なかなか凄いやつだから。パウロは、旧約の宗教を本当に身につけて——パリサイ中のパリサイ人だ——今度はキリストの新約を本当に身に



つけて、両方ともしつかりつかんで、旧約を脱ぎ捨ててしまった。凄いやつです。そのパウロにおけるキリストの光が見えない。だから、ユダヤ人はパウロにも躓いている。私たちの最大のチャンピオンであるパウロに躓いている。見えると思っっているが見えない。

皆さんは、虹のどの色であるかは知らんけれども、一人ひとりはずその色をして大調和の一環をお互いに承っている。黄色い花が赤い花に

「黄色くなれ」

なんて言いやしない。

「ああ結構でございませう」

と、お互いに尊重していく。自重していくとともに今度は「他重」するわけだ、他を尊重する。それでなければ、いくら平和なんて言っても平和はこない。平和の奥に「シャーム」が、平安がなければならぬ。これもギデオンのところを読んでください。

まあ、この第十巻を本当に消化したら、あなた方は凄いことになるよ。覚えるのではない、消化するんです。そうすると、限りなく展開しますから。そういう意味で私は

「第十巻を読みなさい」

と口が酸っぱくなるほど言っているんです。私自身がこれを読みながら展開しているんだからね。

私はキリストに圧倒されると、楽しくてしょうがない。私はキリストに圧倒されて生きるんで、

「自分の信仰」

でなんか生きているんじゃないですよ。

「私は信仰なんかありません。圧倒されて生きています」

と、それだけです。

その圧倒したもうところのキリストが、今日はお生まれになった日です。天界から出現して来た。正に降誕なんです。エホバの神さまが、

「われ降りてかれらをエジプト人の手より救いだし……」(出エジプト3:8)

と言っておられる。全部、霊界から降りてくる。これが恵みのすがたです。

少しくらい調子が悪くたって、みんなすつ飛んでしまうから。この頃だいたい風邪がはやって、なんののかのと故障の方がだいたい多いようだけれども。私だって、それは人間だからいつ故障が起きるか知らんけれども、とにかく、御霊が来ちゃってからは病気が起きないんだ。風邪の方で逃げていってしまう。

黙って祈ってごらん、全身が熱くなる。そういう祈りをしなければだめですよ。

「キリストの中に」

というのは、本当に中に入らなければだめなもの。口先で「中に」なんて言ったってどうにもならん、それでは観念になっってしまう。もう、火の如くなる。これは本当の熱です、



天来の熱、天熱です。この聖霊の証しをしないで私は死ぬわけにいかん。説明なんかできない世界です。

●自然と融け合っている世界

それでは、旧約の方を少し開いていただきます。ミカ書5章2節、

「²ベテレヘム、エフラタ汝はユダの郡中にて小さき者なり。然れどもイスラエルの君となる者汝の中より我がために出づべし。その出づる事は古昔より永遠の日よりなり。

もう決まってしまうっているんだ。

³是故に産婦の産みおとすまで彼等を付しおきたまわん。然る後その遺れる

兄弟イスラエルの子孫とともに帰るべし。⁴彼はエホバの力に由りその神エ

ホバの名の威光によりて立ちてその群を牧い之をして安然に居らしめん。今

彼は^{おおい}大なる者となりて地の極にまでおよばん。

これは不思議な言葉ですよ。7節に、

⁷ヤコブの遺余者は衆多の民の中に在ること人に頼らず世の人を俟ずしてエ

ホバより降る露の如く青草の上にふりしく雨の如くならん。」(ミカ5:2-7)

旧約の中には、非常に自然と融け合っている世界がある。新約にはちよつとそれが欠けている。そのために、

「キリスト教は自然との係わりがない。人間は自然を支配するんだ」

と、そういう角度になってキリスト教がまちがった。旧約のそうだったものを生かしたのがやっぱりゲートなんです。普通のクリスチャンよりかよつぽとゲートは聖書を身につけている。

だから、勝手に自然をあまり利用してしまって、世界がこんなにおかしくなった。やっぱり自己主義なんだ。自然を尊重し親しまない。この地球は神さまが造った大事な我々の庭なんだからね。その庭の木や草をみんな枯らしてしまったり、棄ててしまったり。しいには、食べるものがなくなつて、質が悪くなつてしまふ。野菜がみんなおかしくなつてきた。

まあ、人間というものはしょうがないものだね。どうしても、本当の意味で聖書に帰らなければ、人類はひっくり返つてしまふ。また、その聖書を七面倒くさい、いわゆる神学にしてしまつて、モザイク式なものにしてしまつた。困つたもんだよ。皆さんは御霊の無限無量な内容を自由自在に活かして生きてください。

自然性をいためてしまうようなことは、人間にしろ、動物にしろ、植物にしろ、間違つている。そういう意味からの禁欲的な角度は本当は間違いです。救いは霊肉渾然たる救いなんです。



ミカというのは、

「神我らと共に」（インマヌエル）

という角度の非常に強い預言者です。アモスが神の義をとらえた。これは縦の関係です。ホセアが愛、横の関係です。ミカは神と共に歩くという角度。この預言者たちは大調和をなしている。十二小預言者と四大預言者、それが全部、焦点はキリストにきているわけです。それから今度は使徒たちが出てくる。本当のクリスチャンがでてくる。

「……その群を牧い之をして安然に居らしめん。」（ミカ5・4）

とある。この「安然」とはいい言葉だね、平安ということですよ。平和ではない。平安です。「シヤーローム」というヘブライ語をただ「平和」と言っているだけではだめなんです。これはもともと「平安」です。

「あなたに神さまの平安があるように」という祈りなんです。

私は手紙を書くとき、必ずこの「平安」という文字を手紙の封筒の上に書いておく。キリストとの平安があるように。そうしたら、お互いの関係が平和ならざるを得ない。人のお互いの関係をゴタゴタ、相対的な角度から

「ああだ、こうだ。こう言った、こうした」なんてことを言っているところではない。

「私は何と扱われようと、何と言われようと一向平気でございます」

と言っているのはそういうわけなんです。そんなものは問題にしてない。それでなければ、上からの本当の力は来やしませんよ。

●夢こそ現なり

ホセア書14章4節に、

「4 我かれらの反逆を醫し悦びて之を愛せん。我が怒はかれを離れ去りたり。

5 我イスラエルに対しては露のごとくならん。彼は百合花のごとく花さきレバノンのごとく根をはらん。

「彼」はイスラエルのこと。「百合花のごとく」とは女性に対して。「レバノンのごとく」とは男性に対してです。

6 その枝は茂りひろがり其の美麗は橄欖の樹のごとくその芬芳はレバノンのごとくならん。

「レバノン」とは山の名前だけれども、「レバノンの香柏のごとく」ということです。

7 その蔭に住む者かえり来らん。かれらは穀物の如く活きかえり葡萄樹のごとく花さきその馨香はレバノンの酒のごとくなるべし。エフライムは我がまた偶像と何のあずかる所あらんやと我これに応えたり。我かれを顧みん。



我は蒼翠^{みどり}の松のごとし。汝われより果を得ん。」(ホセア14・4～8)

ここにたくさん植物が出てきます。イスラエルの非常に大事な植物です。「私はそのようなものだ」と、神さまは植物に例えているんだ。そんなことをみんなうっかりしてしまっている。だから、

「野のユリに、アネモネの花に神の栄光が現れているではないか。ソロモンの栄華だって、この一つの花にかなわないんだ」

とキリストが仰った。神の作品の、生命の通っている世界をキリストは見ておられた。人工的なものはだめだよ、どんなにキラキラしていても。キラキラしているほどなおさらだめなんだ。

「野の花がいかにして育つかを思え、空の鳥がいかにして育つかを思え」

と。キリストは本当に自然と一つとなっている心なんです。イエスは非常に豊かな方ですよ。婚宴の譬^{たと}えをしてみたり、晩餐の譬^{たと}えをしてみたり。ひとつも禁欲ではないんだ。恵みとして楽に受けとつていく。全部それは神の栄光が現れるためなんです。

それを勝手に私して、ただもう、いわゆる文明にしてしまったら、これがまたダメになる。そこらの福音の受け方は本当は日本人が一番できるのではないですか。本当の美の世界を日本人は知っているから。日本の自然は美しいもの。ところが、聖書の宗教は荒野の宗教だからね。荒野の宗教でありながら、キリストは荒野ではないんだよ。

「沙漠はサフランの如く」

という。預言者もそうなんだ。イザヤ書35章を見てごらん下さい。そのような素晴らしい自然を夢みている。

「夢こそ現^{うつ}なり」

と私は言いたい。本当の夢を見なさい、そこを現としなさいと。そういう現を自分で現しながら歩くような人になる。「夢か現か」ではない。夢即現なんです。

●大感動の世界

あなた方はただ私の話を聞きに来るのではないんだよ。私と一緒に本当の現実に入るつもりで来る。私は語りながら、その現実に入つてやっているのだからね。説明しているのではない。

あなた方、もつと感動しなさいよ、魂が。感動のない人は本当の世界に入れないです、

「ああ、そうか」

なんてやっているうちは。

「頭で分かるの分からないのと、そういうことではない」

と、私は言っているでしょ、

「降参しなさい」



と。降参すると本当の感動の世界に入る。降参すること自身がもう大感動なんだから。キリストさまは——いよいよ私は、キリストは絶対だと思つている——お釈迦さんとは比べものにならないですよ。本当に大変なひとだよな、33歳くらいでもう向こう側に行つてしまつたんだから。

しかし、御霊をいただくと——我々はどんな小さな存在でもいいよ、御霊が入ったら——御霊の世界は部分でありながら全体なんです。いつも言つていっているとおり、三日月が満月を抱いているんです。逆なんです。満月が三日月を抱いていてのではない。三日月が満月を抱いている。聖霊の世界はそういう世界だ。いわゆる量的な完全なんてことは、人間には望めっこない。質的な完全性は御霊が持つている。

あなた方は破れ器で結構です。破れていないと言つたら、それは偽りだぞ。人間は本当はみんな破れているんだ。その中に本当のものが円現していく。聖霊の世界は、本当に受けとつている人が普通のクリスチャンにも教会にも少ないんだ。

● 信行

私は今なぜホセア書の14章を選んだかというと、

「イスラエルよ、汝の神エホバに帰れよ。汝は不義のためにたお仆れたり。」（ホセ

ア14・1）

仆れたから立ち帰りなさいと。キリストに立ち帰ること。それはまたお迎えすること。こつちからキリストの所へ出かけて行く。降誕節に、向こうから降りてくるから、こつちから一生懸命でお迎えするわけだ。行かなければならない。もう「信仰」と言いたくない。行動なんだ、

「しんこう信行」

なんだ。もう散々私は無教会で、ただ

「しんこう信仰、信仰」

とやつていた。長すぎたな、本当にあれは。そして、

「聖書の研究、聖書の研究。ギリシヤ語だ、ヘブライ語だ」

と。内村先生の第一番目のお弟子さんが七人いる。

塚本虎二、黒崎幸吉、藤井武、あぜがみ畔上賢造、矢内原忠雄、三谷隆正、金沢常雄。

これはみんな秀才です。一高東大で、一番、二番、三番というような連中だ。畦上先生だけ早稲田大学英文科。みんな優秀なんだ。だから、聖書の研究は大変好きなんだ。頭がいから自然にできる。内村先生自身も頭がいい。それで、

「けんくわ研究、研究」

になつてしまった。今でも、その次の連中も「研究」だ。研究教になつてしまった。そうすると、パリサイ性が出てくる。それで、



「新しい参考書を読まなければ聖書はよりよく分らない」という調子になってくる。冗談じゃないよ。

あなた方は、日本語のあまり結構でない訳で結構だよ。その奥の響きを、文字の奥の神の根元語の響きを読んでください。御霊の世界はそれを読ませる。御霊でなかったら、研究ではそれが読めない。全存在的に読むことが大事です。私だって、研究しろといえぱやりますよ。けれども、そんなことをする気もないし、時間的余裕もない。ゲエテだつてそうなんだ。ゲエテの研究というのはいくらでもある。ただいわゆる研究ではゲエテはつかめない。そうでないものをもう一つ持つていなければ。

●無光の光

イザヤ書60章を開いてください。これは第三イザヤだ。とにかくイザヤ書というのは――あなた方、本当に読んでいるかね――60章、61章というのは凄いとこです。

「起きよ、光を発て、なんじの光きたり、エホバの栄光なんじのうえに照出たればなり。視よ、くらきは地をおおい闇はもろもろの民をおおわん。されどなんじのうえにはエホバ（キリスト）照出たまいてその栄光なんじのうえに顕わるべし。もろもろの国はなんじの光にゆき、もろもろの王はてり出るなんじが光輝にゆかん。」（イザヤ60・1～3）

これはキリストという光だ。キリストというのは光体だ。光体が降臨したわけだ。しかもそれはベツレヘムの馬小屋の中に。さつきの121番の讚美歌のように。ただそれを予表して天界に星が現れた。不思議な星が現れた。

「19太陽は最早汝がため日中の光とならず、月華の皓も汝がため光とならず、神こそ汝がため永遠の光となり、汝が神は汝が壮美となろう。20汝が太陽は最早沈むことなく、汝が月華は陰ることなし、そは神汝がため永遠の光となり、汝が悲歎の日は終るからである。」（イザヤ60・19～20）（私訳、第十卷『聖書は大ドラマである』の8月21日の項参照）

全部そこは、この「エホバ」のかわりに「キリスト」なんだ。キリストという光体を受けると、太陽の光ももう要らん、月の光も要らん。否定しているのではないですよ。それはもちろんどつちも光だ。我々も自然界で太陽がなかったらお終いだもの。けれども、私たちの永遠の生命の光は、光体はキリストである。どんな光かと思つたら、この光は見えない。無光の光なんだ。無光の光という言葉は今日初めて言います。肉眼で見えるような光ではないということです。魂の目で見てください。その時にその光が見えてくる。祈りの中でその光にぶつかつててください。そういう光です。「きよしこの夜」というけれども、キリストという光体は世に來た。



● 魂の光

「光」という言葉がヨハネ伝にも書いてある。ヨハネ伝第1章に、

「光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき。」(ヨハネ1:5)

とある。私たちは相対的な光の世界にいます。けれども、本当はこれは暗いんだ。魂の光になっていないから。魂の光は——相対的な昼でも夜でも、太陽や月によるところの相対的な昼や夜はあるさ——その昼夜にかかわらず、魂の光である。空気は、寝ても覚めても私たちは空気を吸っている。そのように、キリストはいつも、寝ても夢の中で魂の光として光ってくださる。そういう光体なんです。肉眼には見えないが、霊眼には見える光。それがキリストという光、光体です。

これはさっきのミカ書にも出ている。

「我が敵人よ我につききて喜ぶなかれ、我仆るれば興あがる。幽暗に居ればエ

ホバ我の光となりたもう。」(ミカ7:8)

「色々なことを言われて、自分は棄てられた。それでもキリストは捕まえている。

キリストは光である」

というわけです。

「棄てられたる者は隅の首石となる」

とはキリストの好きな言葉です。新約聖書にいくつも引用されている。キリストという光体に、霊光体でつくわすまでは、文化文明の光なんてものはみんなだめになってしまう。

どうですか？ 聞いているうちに、力が来たり、光が来てしようがないでしょ。

「エホバわが光となりたもう」

ということですよ。

● 汝の太陽

「18 何の神か汝に如ん。汝は罪を赦しその産業の遺余者の愆を見過したもうな

り。

どんな神もあなたにはかないませんと。「いずれの神か汝に如ん」というのが「ミカ」という言葉なんです。「ミカ」というのは「誰かその如くならんや」という意味です。だから「ミカエール」という天使の名は「誰か神の如くあらんや」という意味です。

神は憐憫を悦ぶが故にその震怒を永く保ちたまわず。19 ふたたび顧みて我ら

を憐み我らの愆を踏みつけ我らの諸の罪を海の底に投げしずめたまわん。

凄いな、これは。 愉快的言葉だね。

20 汝古昔の日わられの先祖に誓いたりし其の真実をヤコブに賜い憐憫をアブ

ラハムに賜わん。」(ミカ7:18～20)

「お前たちの罪咎、背きは全部私は踏みつけてしまったぞ、海の底へ投げ捨ててし



まったぞ」

と。凄いね、これはもう既に福音ですよ。

その預言をみなやったのがイエス・キリストなんだから。キリストが地上に現れたということは大変なことなんだ。乙女マリアを通して聖霊が——聖霊は凄い実体だから——不思議なことをなさる。それでなければ救いはないですよ、正直。

そういう霊光の、霊的、御霊における光体である。それが生まれたイエス・キリストという光体です。普通の眼には見えない。そして、これは何かというところ、

「言い逆らいの徴」

だという。その光が人を躓かせる。ユダヤ人が躓いた。ローマの官憲が躓いた。民衆も躓いた。弟子たちもある意味において躓いた。ごく少数の女性たちががみついていたけれども、しかし、まだ本当の意味でキリストを知っていたわけではない。これは聖霊が来て初めてみんな眼が覚める。光が見えてくる。

マグダラのマリヤというのはいわゆる「罪の女」ではないですよ。いわゆる「罪の女」はキリストの御足に油を塗って髪の毛で拭いた。マグダラのマリヤはキリストの頭から壺を割ってナルドの香油を全部注いでしまった。あれは霊的な女性なんだね。だから、キリストから七つの悪鬼を出された。

「もう私はこの油は使いません」

とって、割って全部注いだんだから、そういう全身的なものです。ロダンが大胆な彫刻を、キリストにしがみついているマリヤの姿を造った。

もう「汝の太陽」は、キリストは沈むことがない。陰ることがない。永遠の光である。だから、魂はいつも相対的な明るさ暗さをのり越えたところの光の世界を歩いている、光を浴びながら歩いている。人には見えない。光に貫かれている。そうすると、その人はもう自分がないから、虹の粒と同じだよ、色々な色彩に、そのキリストの光を受けるといって、霊的な光が、霊的な黄色になったり、赤になったり、紫になったり、桃色になったり、とこういうわけだ。まあ、私が描く天国はおもしろいからね。

そういう本もののクリスチャンが色々な方面で出ていたんだけど、何をしていますか。決して画一的なことではない。それぞれの特色を表したらいいじゃないですか。

● デイバイン・リベンジ (聖なる復讐)

まあ、どうせ私は例外者です。躓かれたり、憎まれたり、棄てられたり。結構でございませぬ。そのかわり、

「デイバイン・リベンジ (聖なる復讐)」

だ。私が復讐するのではない。聖霊が復讐してください。その「デイバイン・リベンジ」



の原点は私の兄貴の北京における死と、母の失明のこの二つです。

ロンドンに行くはずの兄貴が北京にまわされた。この兄貴の死は、私にとってはどうしても無駄にするわけにいかない。もし、兄貴がロンドンに行って、そのままずっといついたら、私はこの信仰に來なかつたかもしれない。そうすると、神さまの業というのは何と深刻なものだろうと思う。

母もせっかく五人の子供たちを独力で育てて、最後には失明というんだから。私はそれに対する最後の詩を書かないでは絶対に死ぬわけにいかん。何年かかってもいい。そういう烈々たるものがあるから、私は衰えないんです。健康法でも何でもありません。同級会の四、五人のひとが

「結局、最後に残るのは小池さんだ」

なんて言っていた。相対的に残るんじゃないんだよ、私はそんな意味で何も長生きしたいわけじゃない。使命を果たすまでは死ぬわけにはいかんという話なんだ。

いいですか。キリストさまを私たちは今日——今日と言ったって、本当はクリスマスはいつだか分からない——とにかく、キリストの降誕をお迎えしたら、光に、光体に貫かれて、私たち自身が光体にならなければ。キャンドルサービスなんかやるけれども、我々自身がキャンドルにならなければ。燈火に。そのともしびは消えない。あなた方は、消えるなんて思っではだめだよ。あなた方に入ってきたキリストの燈火は、聖霊という質をもった燈火は絶対に消えない。どんな嵐があっても消えない。

「いや、私の信仰はまだですから、消えそうです」

なんて、バカ言っでは困るよ。信仰は、

「自分の信仰」

がどんなに強くたって、そんなものは消えてしまうよ。自分の信仰なんか頼っていたら、消えてしまうぞ。キリストの信をたまわり、キリストの生命をたまわる。こういう乱暴な言葉の中身が分かりますか。

自分を何者かと思うな。こんな楽なことはないじゃないですか。

「自分を何者かと思わなければ一番力が来る」

というんだから。なぜ思っているんですか。

「まだ私はこうで、まだ私は聖書の読み方が足りない」

なんて、何を言っているか。聖書を、聖句を読んで、そこを読んだと同時にグーツと力が来るような、生命がくるような、光が来るような、そういう読み方をしてくださいよ。註解書なんか要らんから。まあね、案内書として有名な註解をお読みになったっていいですけども。

そういう燈火は聖霊のともしびです。その実体はイエス・キリストです。おわかります。

